



いとう・しんいちろう ●1956年鹿児島県生まれ。1979年東京大学工学部機械工学科卒業。1981年同大学大学院工学系研究科機械工学専門修士課程修了。日産自動車株式会社勤務を経て、1986年東京大学大学院工学系研究科船舶機械工学専門博士課程修了。防衛大学校講師、ペンシルベニア州立大学客員研究員等を経て、2009年工学院工学部機械工学科教授。学科長等を歴任し、2021年より現職。



荒波に挑むトップ
私の改革論
No.47

工学院大学・学長

伊藤慎一郎

取材・文/仲谷宏 撮影/荒川潤

学生第一の改革をさらに進め 満足度の向上を図る

学生目線でルールを見直し、時空間的利便性の高い学修環境を実現

夢を持ち続けられれば くじけない心が育つ

「夢を見るものではなく、かなえるもの」というのが私の信条です。夢をかなえるには、夢を持ち続ける必要があります。学生には数年先の夢ではなく、人生の指針となるような大きな夢を抱いても

らいたいと思っています。

これは、私の人生経験に基づく願いです。小学生のころ、私は将来、科学者になりたいと思いつつ、中学で生き物に魅せられると、いつしか生物学者を夢見るようになりました。それが、高校に入ると物理や数学の勉強がおもしろくなり、大学では機械工学を専攻し、

そのまま機械の流体力学を研究する道へと進みました。

しかし、生き物に関わる夢がどうしても忘れられない。そこで、39歳のときに、それまでのキャリアを全部捨てて、生き物の流体力学の世界に飛び込むことにしました。一歩踏み出すとそこは誰も研究していないブルーオーシャン

と柔軟に自由に効率的に学べるはず。そうすれば、遠い夢へと向かって、学生時代により多くの時間とパワーを割くことができるのではないのでしょうか。

時空間的利便性の高い キャンパスライフへ

本学では、学生第一の視点に立ち、オンライン授業を積極的に評価し、コロナ禍の取り組みを無駄にしない、本学独自の教育の挑戦を2022年度から始めています。それが、キャンパスライフイノベーションです。

まずは、1時限目の授業を全てオンデマンドにし、学生は2時限目開始の10時10分までに大学に来ればよいようにします。また、キャンパスについても、1、2年生が八王子、それ以降が新宿という役割を見直し、八王子は実験・実習、新宿は発信・交流の場とすることを決定しました。学部・学科ごとに実験・実習の曜日を決めておけば、日によってキャンパスを使い分けるのも容易なはず。両キャンパスを結びシヤトルバスを増便し、バスの中でオンデマンド授業を受講できるようにすることも計画中です。

これらにより、学ぶ場所の自由

度が高まるだけでなく、通学可能範囲もかなり広がります。

1時限目を全てオンデマンドにしたので、授業の開始時間を9時10分から8時30分に繰り上げ、さらに授業時間を105分から90分に短縮し、4時限目の終わりを17時20分から15時40分に変更します。これにより、もっと多くの時間を課外活動や資格取得のための学習などに充てることのできるでしょう。授業時間を短縮したことでも、コマ数を1つ増やす必要がありますが、それはオンデマンド授業で対応する予定です。

食堂の混雑緩和にも取り組みますが、通常の昼休みは2時限目の後ですが、2・3時限目を連続して授業する日を学部・学科ごとに設定すれば、昼食時間をずらすことができます。

こうした改革を進めるために、新宿キャンパスの教室は固定機から自由機に変更し、パーティションで区切って、複数の学年・学科の学生が同じ教室で別々の授業を受講できるように整備していきま。コンピュータ演習室にある工学系の高性能ソフトも、学生が自宅からアクセスできるように、情報基盤を整えます。

時間割や授業時間といった基本的なルールを変更するわけですか

ら、付随して修正が必要となる影響範囲は広く、教職員には相当な負担を強いていると思つています。しかし、学生が伸び伸びと学修に打ち込む姿を目にすると、そうした苦勞もきつと吹き飛ぶのではないのでしょうか。

縁の下で力を発揮する ガバナンス体制を構築

大学運営に関しては、健全性、透明性、誠実性の3つを重視しています。これらはコンプライアンスの基本であり、そうした組織風土が自由で個性豊かな教育・研究を育むと考えています。

その実現には、組織の風通しのよさが欠かせません。私は、物事をトップダウンで進めるよりも、縁の下の力持ちになりたいタイプです。

そのため、私自身が学内のさまざまな場所を歩き回り、教職員から率直な意見を聞くようにしています。

集まった意見などを基に素早く意思決定するため、

でした。研究のネタがごろごろとあり、気持ちよく研究することができました。

最終的に、夢であった生物に関わる研究者になることができました。それが、それは夢を持ち続けることで、困難な状況にあっても、くじけずにいられたからだと思います。困った様子の学生がいたら、「目線を5センチ上げなさい」と声をかけます。悪い姿勢のままでは、困難に打ち勝つことはできないからです。北極星のように指針となる夢をいつも見上げていれば、正しい姿勢を保つことができ、自分らしい人生が送れると信じています。

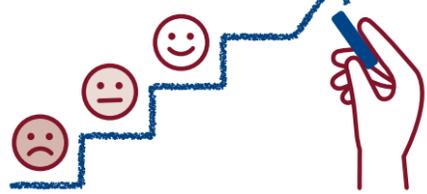
本学の創設者・渡邊洪基の墓石には、「夢」の一字だけが彫られています。夢は、本学の教育の原点です。これまでソーラーカーや学生フォーミュラといった「学生プロジェクト」や、現地での授業を同行する教員が日本語で行う「ハイブリッド留学[®]」など、学生を第一に考えた学修機会の提供を通じて学生の夢の実現を応援してきました。しかし今、コロナ禍の中でオンラインの活用が進み、学生の学修や生活のスタイルは大きく変化しています。「対面」を前提とした大学の「決まり事」を学生目線で見直せば、学生はもつ

副学長の人数を4人から2人に変更しました。私を含めて3人なら、すぐに集まって話し合いができるからです。副学長の人数が減ったため、1人が担当する範囲は広がりましたが、職員への権限委譲を進めて、教職協働で補う考えです。私をめざすのは、「学生が満足する大学」です。そして、その先に、卒業後も大学と強くつながり、互いに社会での活躍をサポートし合う同窓生コミュニティの形成を見据えています。そのため、同窓会組織である校友会との結びつきも今以上に強化します。

これからも、学生のことを第一に考えた改革を積み重ね、夢を描く大学づくりを進めていきます。

注目の経営指標

学生の満足度



「学生が満足する大学」が、めざす大学の姿だ。満足度の高い学生生活を送れば、大学への帰属意識が高まり、卒業後も先輩たちの社会的活躍を支援するコミュニティの形成が期待できるからだ。大学を「卒業した場所」だけにしない、人と人とのつながりの強化を見据えている。